

図7 Magazine War Guide実物写真
1943年7月17日発行号（10月～11月号向け）

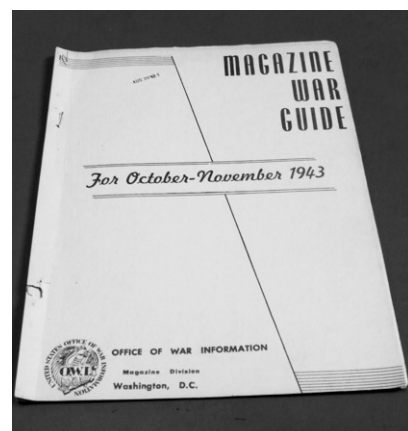


図9 LHJ誌 1943年7月号表紙



図11 LHJ誌 1943年9月号表紙



図8 LHJ誌 1944年8月号表紙

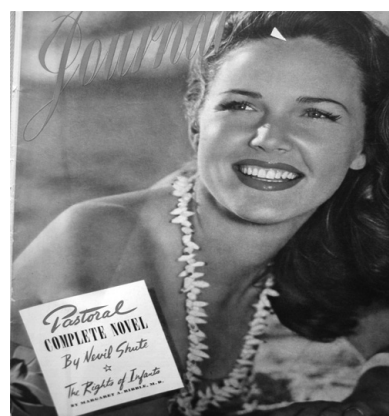
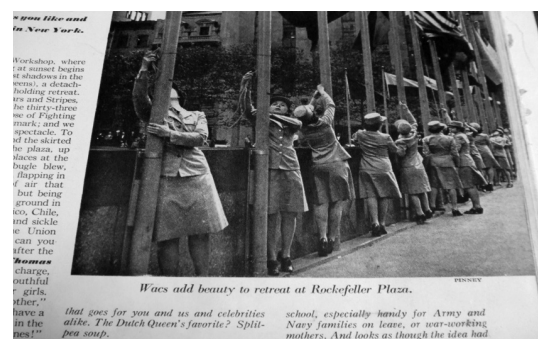


図10 LHJ誌 44年8月マニキュアの広告



図12 LHJ誌 1943年12月
「WACsロックフェラー・プラザに美を添える」



写真週刊誌『ピクチャー・ポスト』の表紙に見る 第二次世界大戦下の女性像

杉村使乃

“But battles are ugly when women fight.”⁽¹⁾

C.S.ルイスの『ナルニア国年代記』の第一巻では、第二次世界大戦時、ロンドンの空襲を逃れて、4人の子どもたち、ピーター、スーザン、エドモンド、ルーシーが郊外のカントリーハウスに疎開（Evacuation）する。ある日、古いワードローブにもぐりこんだ彼らはナルニアという異世界に迷い込む。戦争という「現実」から避難し（evacuate）たはずなのに、彼らがたどり着いた異世界でも覇権をめぐる戦いは展開していた。その「戦場」では、「アダムの子」たちは剣を取り戦場で戦うことを、一方、「イヴの娘」たちは、自分を守り、傷ついた他者を癒すことをそれぞれ奨励される。ファンタジックな人工的に構築された「フィクション」ではあるが、そこには明確にジェンダーによる役割分担が示されている。

しかしながら、こうした戦時下において性による役割分担の表象は、必ずしも「実態」を反映していないかもしれない。イギリスに関する限り、女性＝平和主義という単純な公式は全く当てはまらず、帝国主義の下、多くの戦争を戦ってきたこの国の女性たちは、「兵士」を産み育てる「母親」を始めとして、さまざまな形で戦争に「参加」してきた。上記で「イヴの娘」たちが携わる看護の仕事は、フローレンス・ナイチンゲールによる改革後、組織や衛生面の改善が見られ、比較的女性が「貢献」しやすい分野となった。看護における「癒し手」としての役割は、19世紀の代表的な女性像の「家庭の天使」（Angel in the House）を連想させ、女性の仕事として受け入れられやすかったであろう。また、軍隊内部や戦場における調理、配膳、清掃といった作業は、「家庭」という「私的領域」にも通じるものがあることから早くから女性に分担されていた。しかしながら、第一次世界大戦の頃より、戦争に必要な物資を送り出す工場における女性労働者は無視できない存在になった。また、より多くの男性兵士たちを前線へと送り出すため、軍隊の中でも、事務、武器の整備、輸送などの分野が新たに女性たちへと開かれていった。⁽²⁾

第二次世界大戦下のイギリスで最も大きな影響力を持っていたメディアの一つ、『ピクチャー・ポスト』という写真週刊誌を開くと、実際には自分の身を守ること、あるいは看護だけにとどまらなかった戦時下の女性たちの「活躍」を目にすることができる。ここでは、1938

年から1945年にかけて、この雑誌の表紙に見られた一連の女性像を取り上げ、第二次世界大戦下のイギリスで、女性たちがどのように表象されていたのか、また戦時下においてジェンダーはどのように形成されていたのかを考察する。「写真」という、一件、「現実」を映し出し、「ノン・フィクション」であると感じさせるメディアを扱うが、戦時下という状況、国家や出版社の方針、そして当時のジェンダー観を照らし合わせてみると、そこに見られる女性と男性の表象には、ある傾向が見られるようだ。一見、現実的な表象は、戦時下のジェンダー形成において、どのような「幻想」を構築していったのか見ていきたい。

1. 『ピクチャー・ポスト』というメディア

『ピクチャー・ポスト』(正式名称 *Picture Post: Hulton's National Weekly*) は1938年10月に創刊し、1957年に廃刊を迎えた。ここで取り上げる第二次世界大戦の前後の時代を代表するメディアの一つだと考えられる。発行頻度は週に一回で、価格は3ペンス(3d)であった。版型はB4版をやや小さくした大きさ(縦35センチ×横26センチ)である。表紙は同じく写真週刊誌として有名なアメリカの『ライフ』と類似しており、誌名とメインとなる記事のヘッドラインは赤に白抜きであるが、他は白黒で印刷してある。ページ数は、創刊時は75ページで始まったが、その後、88～104ページに拡大した。しかしながら戦時中、物資不足のため45～30ページ程度へと減少している。グラビアと活版の割合は7:3～6:4だろうか。販売部数は創刊号750,000部→4ヵ月後1,350,000部→1942年1,422,000部→1943年950,000部→1952年935,000部と推移している。対象となる読者層は、読者欄(“What Our Readers Say”)、また広告掲載から判断して男女共に広く読まれていたと考えられる。⁽³⁾

この雑誌の正式名称に登場している名前は、創始者のエドワード・ハルトン(Edward Hulton)で、親子三代に渡り新聞・雑誌を中心とした出版界で活躍した。初代編集長ステファン・ローラント(Stephan Lorant)はハンガリー系ユダヤ人で、かつてドイツにおいて写真雑誌『ミュンヒナー・イラストリールテ・プレッセ』(1928-1933)の編集長であった。その後、1933年のヒトラーの政権獲得により、ドイツではこのような革新的な写真雑誌が消え、ローラントは投獄される。彼の獄中記、『私はヒトラーの囚人だった』(*I was Hitler's Prisoner*, 1935)は、ロンドンで評判を呼ぶ。仕事を失ったカメラマンやジャーナリストたちが、亡命先で活躍し始めたのがこの時代であった。〔武藤2007: 274〕ローラントは1940年にアメリカに移住し、その後、創刊当時より関わっていたトム・ホプキンソン(Tom Hopkinson)が編集長になる。ハルトン自身は保守党支持であったが、編集方針の大部分は二人の編集長に一任され、戦時中は一貫して反ナチズムという姿勢を取っていた。

1939年10月7日号では創刊一周年を記念して、改めてこの雑誌の編集の4つの基本方針を示す。まず、「普通の人びと」(“ordinary man and woman”)を尊重し、彼らの視点

に立つ。第二に、これまで見られなかったくらいに「写真」で物事を伝える、第三に、民主主義を推し進め、全体主義に反対する姿勢をつらぬく。そして最後に、社会的地位を持っている人びとよりも「普通の人びと」の生業に興味を向け、写していくことを挙げている。⁽⁴⁾

『ピクチャー・ポスト』の成功の背景として、1930年代には、視覚的な素材を使った『デイリー・エクスプレス』や『デイリー・メール』などの大衆紙が多く読者を集め、写真週刊誌を受け入れる素地ができていたことを福西由美子は指摘している。〔武藤2007: 276〕また、上記の編集方針は、第二次世界大戦におけるイギリスの姿勢、また社会を強く反映していたと考えられる。イギリスにとっての第二次世界大戦の一般的な評価は、「反ファシズム」の「よき戦争」である。しかしながら、イギリスにおいては第一次世界大戦で疲弊した経済状況の中、戦わざるを得なかったため、おのずと「総力戦」(Total War)の様相を呈していった。また結果的には戦勝国となったが、イギリス本国にドイツからの激しい空襲(Blitz)を受けたため、前線とホームフロントの区別が曖昧になり、女性を含む多くの市民が様々な形で戦いに参加することが求められた。〔クラーク2004: 198-206〕この戦争を戦い抜いた「普通の人びと」に意識的に目を向け「反ファシズム」を詠った『ピクチャー・ポスト』は、第二次世界大戦下でもっとも影響力が強かったメディアの一つとなり、1939年11月にはこの雑誌の影響力に注目した情報省が編集部を召還し、写真や雑誌を使った公式プロパガンダ政策への協力を要請するまでに至った。〔武藤2007: 286〕

以上のことから、『ピクチャー・ポスト』に見られる人びと(女性・男性)の表象は、この時代を代表するものとして考えられる。第二次世界大戦中の女性表象を考える前に、創刊から開戦までの傾向を見てみたいと思う。⁽⁵⁾女優は女性を扱った表紙の中でも大きな割合を占め、固有名詞が明記される。バレエ、スケーターを含む舞踏の分野も比較的、固有名詞の表記が多い。一方、男性の場合、固有名詞は、俳優だけでなく、政治家、軍人、スポーツ選手に表示されている。無名で現れる男性は、多くの場合、職業上の制服を身につけているため、その社会的地位などが服装から推察できる。女性・男性がどの分野で「プロ」として活躍していたのか、ジェンダーによる明確な職業区分が伺われる。

創刊号は二名のカウガールたちがポーズを取りながら空中に飛んでいる瞬間をとらえたものである。この表紙については、ハルトンとローラントでは意見の相違があったようだ。ナチス・ドイツの脅威が高まる中、前者は戦艦の写



図版1 1938年10月1日(1.1)創刊号

真を表紙に採用したいと考えていたが、後者は、読者を引きつけるためにも“girl”を持ってくるべきだと主張した。〔図版1、Weightman 1991：8-9〕その後続く女性を扱った表紙の多くは“girl”と呼ばれる若い女性たちである。俳優の場合、男性は年配のベテラン舞台俳優やエンターテイナーが主であるが、女優は若いスターたちで、彼女たちのデビューを取り上げることも多い。

『ピクチャー・ポスト』が扱うトピックは幅広く、時事問題だけでなく、エンターテインメント、ファッションにも毎回3～4ページ割かれている。女性が登場する表紙で多い分野の一つがファッションである。ファッションと共に季節感を伝えるものとして四季折々の風景の中の“girls”が登場する。(図版2、3)「女性」と「自然」に相似を見出すのは、「ロマン派」(Romanticism)にも共通する傾向であろう。⁽⁶⁾また特徴的なのは、脚線美の露出である。「写真」



図版3 1939年4月8日(3.1)
The First Day of Sunshine

という視覚メディアは、長くタブー視されていた女性の脚の露出に注目している。ダンス、ファッション、スポーツの分野で脚線美を大胆に見せている写真が目につく。点数表ではファッションの分野に分類しているが、女性の「笑顔」をクローズアップしている表紙も目立つ。表情については、政治家や軍人の男性は執務中の場合が多いため、表情は比較的眞面目、深刻なものが多く見られる。以上、簡単に戦前までの傾向を述べたが、戦時下ではどのような変化が見られたのか、次に第二次世界大戦下に出版された号を見ていく。



図版2 1939年1月21日(1.21)
The Girl in the Snow

II. 第二次世界大戦下のイギリスにおける女性表象

個々の表紙の表象分析に入る前に、イギリスにおける「第二次世界大戦」について確認しておきたい。1939年9月1日のドイツによるポーランド侵攻を受けて、9月3日に対独宣戦を布告する。前線は複数に渡り、東西ヨーロッパ、北大西洋、地中海、北アフリカ、そして日本がアメリカに宣戦布告した後は太平洋上へと拡大していった。1940年4月までは懸念されていた爆撃も無く「退屈な戦争」(“Bore War”)、「まやかしの戦争」(“Phony War”)と呼ばれていた。しかしながら7月以降は、「ブリテンの戦い」(“Battle of Brit-

ain”)と呼ばれる空中戦を始め、陸、海でも激しい戦闘が続いた。そしてアメリカの参戦、1944年、6月のノルマンディー上陸を経て、1945年5月7日にフランスで、そして8日にドイツで、ナチス・ドイツ軍は正式に敗北を認める。(VE-Day: Victory in Europe Day)しかしながら太平洋上では戦闘は継続していたため、「忘れられた」イギリス兵たちがいた。そして1995年8月15日(アメリカでは14日)に日本の敗戦が認められ、9月に正式に宣言される。(VJ Day: Victory over Japan)『ピクチャー・ポスト』はこの二つの終戦を前者は明るい開放感を以って、後者は原子力がもたらす不安を以って伝えている。

1 固有名詞の表示

固有名詞の表示がある女性は、やはり女優・芸人がある主である。女性の部門で一番多数を占めていたものもやはり「女優」で、戦時下でも華やかな衣装をまとい、笑顔で明るい雰囲気を与えている。イギリスの女優では、映画だけではなく、舞台やパントマイムの女優たちも登場する。ダンサーなど、エンターテインメントの分野で活躍する女性たちの写真は戦時下でも大きな割合を占め、季節ごとの娯楽の到来を伝える記事が同時に掲載される。こうした女性たちの主な活躍の場はイギリス本国、そしてアメリカである。ダンサーに関して言えば「脚線美」の露出も戦前に引き続き見られる特徴である。

芸能の分野で「戦時」という特色が現れているものとしては、スペイン内戦を題材にした『誰がために鐘は鳴る』のイングリッド・バーグマン、そしてUSというバッジのついた制服を着て、アルジェリアの戦地を慰問するマレーネ・ディートリッヒが挙げられる。(図版4)女優の数に比べて男性俳優の掲載は激減する。また年齢的にも女優は若い女性であるのに比べ、単独で現れる俳優の多くはベテラン舞台俳優である。比較的若い俳優の場合は映画の撮影現場、あるいは舞台上で、女優と一緒にいるところが見られる。若い男性は専ら「兵士」として表紙に登場するようになる。ローレンス・オリヴィエとヴィヴィアン・リーというイギリスの大スターカップルのプライベートのひと時を写した表紙写真には、「オリヴィエは軍艦に配備された空軍への入隊を控えている」とキャプションに書かれている。(“The Oliviers at home : Laurence Olivier and his wife, Vivien Leigh. Olivier is leaving shortly to join the Fleet Air Arm.”)戦時中、若い男性の俳優・芸人はほとんど登場しなくなる中で、このオリヴィエの登場は例外的なものだが、映画という虚構の世界の存在ではなく、現実の戦



図版4 1944年6月10日(23.11)
キャンプを慰問する
マレーネ・ディートリッヒ



図版5 1941年4月5日(11.1)
出兵前のひと時を過ごす
オリヴィエ夫妻

場へ向かう一兵士として捉えられている点が興味深い。同じく戦場へ送られている若い男性たちに配慮した結果であろう。(図版5)

固有名詞の表示のある男性は、政治、軍事、そしてわずかであるが宗教の分野で見られる。時の首相、ウィンストン・チャーチルは表紙に4回(内3回は単独)登場する。トップハットを被り、そして時には葉巻をくわえた彼の姿、そしてラジオで国民に呼びかけた彼は第二次世界大戦時のこの時代のイギリスを象徴する人物の一つである。軍部の司令官については、戦況を踏まえて、随時活躍を見せた男性たちが表紙に現れた。すでに多くの物資を北大西洋経由

のアメリカからの輸入に頼っていたが、連合国としてアメリカが共に戦うことが心待ちにされていた。ルーズベルト大統領の笑顔の写真には「民主主義」という共通の旗印が強調されたキャプションがつけられている。(1941年6月14日、11巻11号)ヨーロッパ戦線を戦い抜くためにはソ連との連携が重要であったが、1945年2月4日のヤルタ会談を受け、1919年の若きスターリンの写真が表紙に登場している。(1945年2月17日26巻7号)男性では、政局、戦況の局面におけるキーパーソンが表紙に採用される一方、女優、芸能人以外で、固有名詞が明記されている女性はエリザベス王妃、また著名な政治家・軍人などの母、妻、娘たちである。(7)

2 If you're an English girl...

女優・芸能人に次いで多く見られたものは、戦前と変わらず、ファッション、季節感を喚起する若い女性たち(“girls”)である。中には戦時であることを忘れさせるかのような水着姿さえ現れる。(図版6)戦争が「ファッション」に落とした一抹の「影」は、一見、若い女性が初夏の日差しの中、笑顔でくつろいでいるように見える表紙写真に見られる。キャプションには「クーポン」(配給切符)という言葉が含まれていることから、戦時中のファッションとやり繰りが印象付けられる。(図版7)⁽⁸⁾それでも最新のファッションや季節感を伝える表紙は戦時中を通して一定の量が保たれている。これは日本の場合と比べると圧倒的な物質的豊かさの違いを印象づける。



図版6 1940年5月18日(7.7)
「それでもファッションは続く：
この夏の最新水着」



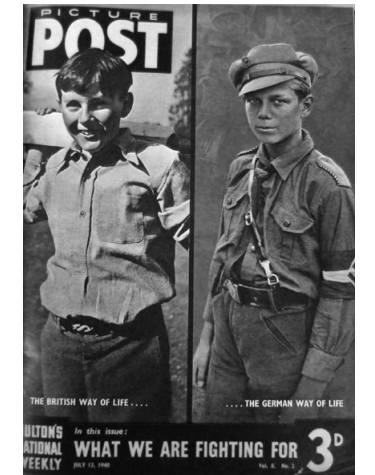
図版7 1941年6月5日(12.1)
The Girl with the Sun Hat：
クーポンで手に入れる
夏のおしゃれ

のアメリカからの輸入に頼っていたが、連合国としてアメリカが共に戦うことが心待ちにされていた。ルーズベルト大統領の笑顔の写真には「民主主義」という共通の旗印が強調されたキャプションがつけられている。(1941年6月14日、11巻11号)ヨーロッパ戦線を戦い抜くためにはソ連との連携が重要であったが、1945年2月4日のヤルタ会談を受け、1919年の若きスターリンの写真が表紙に登場している。(1945年2月17日26巻7号)男性では、政局、戦況の局面におけるキーパーソンが表紙に採用される一方、女優、芸能人以外で、固有名詞が明記されている女性はエリザベス王妃、また著名な政治家・軍人などの母、妻、娘たちである。(7)

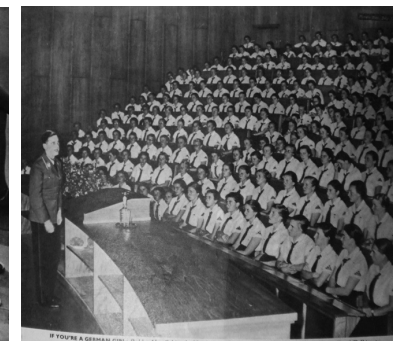
そして「もしあなたがイギリス人女性だったら」という見開きのページでは、ナチスの講演に糸乱れず聞き入る若いドイツ女性たちと、水着を着て浜辺でくつろぐイギリスの“girls”が対比されている。(図版9、10)野外での「休日(holiday)」の感覚、戦時中にまぶしすぎるほどの若い女性たちの笑顔とファッションは一見、場違いに感じられる。しかしそれは「自由」



図版9 “If You're an English Girl :
A Familiar Scene at Any Seaside Resort”



図版8 1940年7月13日(8.2)
「何を守るために私たちは
戦っているのか」

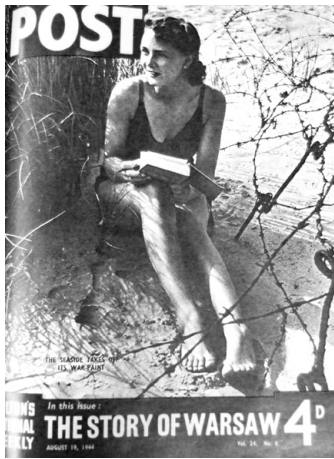


図版10 “If You're a German Girl...”

明るく生き生きとした若い女性たちの表情や肢体は、「写真」というメディアが捉えたい「オブジェクト」の一つであろう。更に第二次世界大戦下のイギリスでは、こうした“girls”は戦争の大義を象徴する役割を果たしていたのではないだろうか。前述したように、『ピクチャー・ポスト』は当初より、民主主義を推し進め、全体主義に強く反対するという姿勢を示してきた。⁽⁹⁾こうした編集方針の下、一見、退廃的にさえ思われるファッションナブルな若い女性たちは、イギリスと敵国ドイツとの差異化に一役買っていたのではないだろうか。1940年7月13日発行の8巻2号では、「何を守るために私たちは戦っているのか」(“What We Are Fighting For”)という30ページ

(47ページ中)に渡る特集が組まれる。表紙には、向かって左は「イギリス的」な生活を送る健康で明るい少年が戸外で笑っている。そして右はナチスの腕章をつけた暗い目つきのドイツの少年が並び、あからさまな対比が成されている。(図版8)。「民主主義」対「全体主義」は、政治の形態、政治家たちの表情、国民たちの休日の風景、自然や建築物、家庭、娯楽、子どもたちの様子など様々な分野において、「民主主義」とイギリスの優越が強調される。

そして「もしあなたがイギリス人女性だったら」という見開きのページでは、ナチスの講演に糸乱れず聞き入る若いドイツ女性たちと、水着を着て浜辺でくつろぐイギリスの“girls”が対比されている。(図版9、10)野外での「休日(holiday)」の感覚、戦時中にまぶしすぎるほどの若い女性たちの笑顔とファッションは一見、場違いに感じられる。しかしそれは「自由」



図版11 1944年8月19日 (24.8)
「戦時色を落とした海岸」

を象徴し、ナチス・ドイツとの差異化をはかり、ある種の「イギリスらしさ」(Englishness)として扱われ、そして戦場の男性たちにとって命をかけて守るべきものの象徴となったのではないだろうか。ようやく戦争終結のきざしが見えてきた1944年8月19日24巻8号の表紙を見てみよう。砂浜で、水着姿でたたずむ女性の前に張り巡らされた十字鉄線。戦時中、敵の侵入を恐れて閉鎖されていた海岸がようやく市民たちに開放されたことを告げる記事を紹介する写真である。「自由」の女神たちがようやく解放されつつあることを報せる一枚である。(図版11)

3 「母子像」の役割

女性の「家庭」での役割、「母性」がかつては強調されていたこと、また戦時下の女性の大きな「貢献」の一つに次世代の「兵士」を生み育てることがあることを考えると、戦時中の『ピクチャー・ポスト』の表紙に見られる母子像の割合は少ないと感じられる。また、「母子像」の扱い方にもある傾向が見られるようだ。若い母親と幼い子どもを写した写真は、やはり季節感、特に命が芽吹く春のイメージを伴っている(図版12)一方、年配の女性と子ども(イギリス人)を写したものは、ドイツ軍の空襲(Blitz)の恐怖と苦悩を表している。キャプションにはこの女性について「養母」(“foster mother”)と記しているため、命の再生産という母親のイメージは薄い。(図版13)もしかしたら母親は子供を預け戦



図版12 1942年3月14日 (14.11)
「春のおとずれ」



図版13 1940年9月28日 (8.13)
「ヒトラーの敵：空襲を受けたイースト・エンドに住む子どもと養母」



図版14 1945年5月19日 (27.7)
VE-Day

時労働に就いていたのかもしれない。また、多くの子どもたちが都市部から郊外へと疎開したことも、母子像の点数に影響を与えていたとも推測される。⁽¹⁰⁾

その他に戦争と結び付けられた「母子像」は3点ある。うち2点はイギリス人と思われる「母子像」で「勝利」と結び付けられている。(図版14)外国人の母子像はまた違った解釈を喚起する。ヨーロッパ戦線が一応の終結を見せた後には大量の難民たちが残され、そこで救済に当たったのが、後の国際連合の前身であるUNRRA(United Nations Relief and Rehabilitation Administration)である。カップ一杯のミルクを与えられ安堵する難民母子の姿から、「良き保護者」としての連合国の役割が伺える。(1945年9月15日28巻11号)

ナチス・ドイツが女性の重要な役割として、全面的に「母性」を強調していたことを考えると、『ピクチャー・ポスト』における母子像の扱いは、敵国ドイツの価値観との差異化を図っていると考えられる。ヨーロッパ戦線終結後に表紙に現れたドイツの母子像は非常にアイロニカルな形で使われている。真っ直ぐ正面を見つめる母親と母親にしがみついている男の子、子どもは少し怯えているようにも見えるが、ことさら不快感をもよおさせる写真ではない。この写真は再度、「ホロコースト」を暴露する記事の最初に添えられる。「慈愛」を喚起させる「母子像」であるが、穏やかな母親の微笑の背後に隠されていた残酷な所業——食物を与えられず強制労働につかされていた捕虜たち、殺された子どもたち——が暴かれている。ドイツの母子像をこのような形で取り上げることは、ナチス・ドイツの提唱していた「母性」の意義が問う役割を果たしているだろう。(図版15、16、17)



図版15 1945年5月5日 (27.5)
多くを隠す二つの顔：
ドイツの母と子



図版16 同号、
「ヨーロッパを驚愕させた問題」



図版17 同号

4 「動員」の女性たち：「ホモ・ソーシャル」の不在⁽¹¹⁾

戦時中に新しく表紙に現れた項目は、戦時労働に動員された女性たちである。より多くの男性たちを戦場にするため、多くの女性たちが工場、農場、そして陸海空軍に動員された。「補助的な、援助的な」(“auxiliary”)という言葉が陸海空全ての女性部隊に付けられている。また1941年12月には国民を動員する法が整えられ(National Service No.2 Act)、19歳から30歳までの未婚の、あるいは子どものいない女性たちが戦時労働に従事した。その数は19万人に上ったと言われている。主に陸軍の援護活動を行ったATS(Auxiliary Territorial Service)、農場に主に住み込みで働き、戦時中の食糧供給に貢献したLand Girlsは比較的多く表紙に登場している。軍の援護で、一部の女性は前線でも活動していたが、表紙の写真は看護の1点(アメリカ人)を除き、全て国内での活動のみを伝えるものである。また特徴的なのは、こうした動員の女性たちの写真の多くもやはり他の“girls”同様、笑顔が強調されている点である。(図版18)⁽¹²⁾

戦時労働に就く女性たちであっても、そこでレンズを向けられているのは彼女たちの笑顔、若々しさ、そして「女らしさ」である。ATSの女性が制服には全くふつりあいな最新の帽子を試着している写真がある。帽子は重要なファッション・アイテムで、季節感を伴ってほぼ毎年表紙や記事で扱われている。ここでは、終戦が来れば即座に制服を脱ぎ捨て、このような帽子の似合う女性へと変身することが(するべきであることが)仄めかされて



図版19 1945年1月6日(26.1)
「この帽子をかぶるチャンスはくるだろうか」



図版20 1942年2月14日(14.7)
Women Prepare for War



図版18 1941年6月21日(11.12)
ランド・ガール

いる。(図版19)

動員された女性が「同僚」の男性と共にいる写真はほとんどない。図版20では、女性が真剣に銃の扱い方を男性から習っている。実際に殺傷能力のある武器の扱いは極限られていたとは言え、美しく若い女性が武器を手にする図は、女性の新しい「活躍」の場を示唆しているかもしれない。しかし年上の経験ある男性か

ら若い未経験の女性が学ぶという配置は、そのまま既存の男女の上下関係を示唆している。実際に戦闘に参加している女性兵士を扱った表紙は3点あるが、それらは全てユーゴスラヴィアのパルチザンの女性たちである。ファッション・モデルと見まごうばかりのイギリスの女性たちとは明らかな差異がそこには見られる。(図版21)

戦時中、『ピクチャー・ポスト』が取り上げた「普通の人びと」が、女性では「動員」の女性たちであったのなら、男性の場合は、圧倒的に「兵士」であった。無名の兵士たちは、任務中の真剣な顔か、戦況によっては余裕の笑顔で表紙に表れる。また2人か3人といった複数の男性が一枚の写真に載っていることが多く、戦場での男同士のつながり(male bond)を印象づけている。動員された制服の女性たちは単独で表紙に現れ、レンズはその働きよりも美しい笑顔にフォーカスするのに対し、男性たちは、協力し、戦うものとして表象されている。(図版22、23) コモン・ウェルスや連合国の連帯は表紙にも反映されていた。男性では各国の政治家や志願兵たちの姿が、また女性も戦時労働を志願したアメリカ、カナダ、ニュージーランド、西インド諸島の女性が表紙に現れている。いずれも男性の場合は、イギリスとの連帯、男性同士の連帯を喚起するよう複数の人物が一緒



図版21 1943年11月20日(21.8)
ユーゴスラヴィアのパルチザン



図版22 1939年10月21日(5.3)
新しい戦時歌謡、
「走れアドルフ、ラン、ラン、ラン」



図版23 1944年5月20日(23.8)
彼らは川を渡った。

に撮影されるのに比べ、動員された外国人女性たちは、イギリス人女性と同様、制服を身につけ笑顔で任務につく姿が単独でレンズにとらえられている。女性を扱った表紙における同性間の「連帯」(homo-social)の不在は、彼女たちの就いている任務が戦時という一時的なものであることを印象付ける。

まとめ

以上、述べてきたことから第二次世界大戦時の『ピクチャー・ポスト』の表紙写真には、ジェンダーの違いによって以下のような傾向が見られることがわかる。

ジェンダー	女性	男性
固有名詞の表示	芸能、娯楽、有名人の母・妻・娘	政治家、軍人
戦時下の「普通の人びと」	“girls”、「動員」の女性たち、ホーム・フロント	兵士、前線
撮影の特徴	笑顔、単独	執務・任務中、真面目・深刻、笑顔（余裕）、連帯

表紙写真に置いては、上記のように「女性領域」と「男性領域」は明確に分けられ、『ピクチャー・ポスト』は二つの領域をコミュニケーションする役割を果たし、改めて「女らしさ」とは何か、「男らしさ」とは何か、そして「イギリスらしさ」(Englishness)とは何かを確認させる^{メディア}媒体となっていたと考えられる。一見、戦争とは無関係に見えるファッションや季節感を伝える“girls”たちは、戦争の大義としての「自由」・「解放」、そして「イギリスらしさ」(Englishness)を象徴していたと考えられる。⁽¹³⁾戦時下において、男性たちの「連帯」が写真を通してくり返し確認されるのと比べ、女性たちの場合は、同性間のつながりは分断されている。実際、終戦とともに戦時に確保されていた労働の場から、「家庭」へと多くの者が戻された (demobilization)。

シンシア・エンローは社会のあらゆる側面で「軍事化」が進められていることを著書『策略』の中で分析し、「軍事化」は伝統的に密接に結び付けられてきた男性や「男らしさ」ばかりでなく、女性や「女らしさ」もコントロールしてきたことを明らかにした。エンローはまた第二次世界大戦時のイギリスにおける女性の動員に関して、軍部は、軍事化された「男らしさ」の文化を維持するようなやり方でのみ、兵士として女性を使うため、その政策は「女らしさ」を保つようなやり方で女性たちを利用することを念頭に置いていたと指摘している。〔エンロー2006：173〕この点は、『ピクチャー・ポスト』の表紙にも反映されていると考える。冒頭に触れた物語のように、「イヴの娘」たちと「アダムの息子」たちでは、明らかにその果たす役割は違うものとして表象され、戦時下の女性たちは“ugly”な^{バトル}戦闘とは一線を置いた“beautiful”な存在として表紙を飾ったのである。

註

本稿は、共同研究「表象に見る第二次世界大戦下の女性の戦争協力とジェンダー平等に関する国際比較」(2005～2007年度 科学研究費 基盤研究(B) 課題番号17310154 代表 加納実紀代)の成果の一端である。また、日本国際文化学会 第6回大会(2007年7月15日 於名桜大学)での研究報告を元としている。

Picture Post (1938-1945)の資料収集、表紙写真撮影にあたり、中央大学西洋史研究室に多大なるご協力をいただいた。ここに感謝を申し上げたい。

- (1) C. S. Lewis, *Chronicles of Narnia: The Lion, the Witch and the Wardrobe*. (Chapter 10, p.103) より
- (2) 女性の戦争参加については、Anderson, Brayley, Briggs, Cooper, Harris, Priestley, Wadge,そして拙説「工場と戦場における女性：第二次世界大戦下のイギリスにおける女性の戦時奉仕」を参照。また、ロンドンの陸軍博物館(National Army Museum)の“camp followers”の展示では戦場で兵士たちに食物を提供する女性の役割が古くから定着していると感じさせる。軍隊における看護組織とその発展についてWadgeが詳しい。本報告では、The United Kingdomを指す言葉として「イギリス」という呼称を使う。第二次世界大戦次には、すでに「大英帝国」(British Empire)という言葉は、他からの支援を受ける上でマイナスに働くことにこの国は気がついてきた。戦時中は、国を指す言葉として「ブリテン」(Britain)という言葉が良く使われるが、多くの場合、連合王国内の全ての国、民族を対等なものとして扱うのではなく、「イングランド」を中心とする価値観を内在していたと考える。こうした曖昧さも含めて、「イギリス」という呼称を使用する。呼称については飯田も参照のこと。
- (3) 『ピクチャー・ポスト』に関する基本情報についてはHopkinson, Weightman,そして武藤他、編『愛と戦いのイギリス文化史 1900-1950年』、第16章、福西由実子『『ピクチャー・ポスト』の時代』を参照。また出版部数の数値は、<http://www.spartacus.schoolnet.co.uk/Jpicturepost.htm> (1/03/08 閲覧)による。
- (4) “The First Year” *Picture Post* Vol. 5, No. 1 (October 7, 1939) pp.24-28.
- (5) Vol. 1, No. 1～Vol. 4, No. 9 計49冊。男女別点数表を参照。点数表は創刊から、戦後の混乱を伝える写真の掲載が見られた1945年末までを扱っている。()内はイギリス本国以外のナショナルリティが示唆されているものである。
- (6) イギリスにおける「ロマン派」(Romanticism)を明確に定義づけることは難しいが、ここでは1780年～1830年前後に起こった文学の一つの流れを指す。そこでは都市や文明に対する自然と女性や子どもがイメージの中で結び付けられることが多い。自然の中に女性性を見出す伝統は、もともとヨーロッパの文化にもあったが、男性の「理性」や「力」によって、観察され、開拓される「自然」を女性的なものとして表象する傾向はジェンダーによる力関係の不均衡を孕んでいる。「ロマン派」については、De ManとBygraveを参照。
- (7) Diana Churchill (Vol.6, No. 7, February 17, 1940)、蒋介石夫人 (Vol. 17, No.1, October 3, 1942)、Elizabeth, The Queen Mother (Vol.19, No.13, June 26, 1943)、Lady Montgomery (Vol.21, No.3, October 16, 1943) 尚、これらは男女別点数表では、「政治」に分類してある。
- (8) 戦時中の庶民の暮らしについては、Brown & Harrisが詳しい
- (9) ハルトンは政治的には保守派であったが1945年頃までは社会改革を主張し、労働党を支持することもあった。雑誌の方針に関してはスタッフの裁量に任せていた。しかしながら1950年には反労働党の姿勢を明らかにし、ホプキンソンを始めスタッフの一部と衝突するようになった。〔Weightman 1991：8-9〕

- (10) 歴史の「再審」が進む中で、政治、軍事の場を中心であった男性の視点を中心としたものばかりではなく、女性、子ども、動物という従来、戦争の「歴史」では取り上げられなかったものたちの視点からの歴史の見直しが進んでいる。ロンドンの帝国戦争博物館(Imperial War Museum)の近年の展示、「戦争と女性」(Women and War, Oct.2003-April 2004)、「子どもたちの戦争」(Children's War, March 2005-January 2010)、「動物たちの戦争」(Animals' War, July 2006-April 2007)はこうした研究の成果を反映している。「子ども」に関しては、Juliet Gardinerの著書が詳しい。
- (11) E.K.セジウィックは、同性間の社会的絆(homo-social)を分析し、特に男性の場合は、このつながりによって、同性愛を排除し異性愛者であることを互いに確認しつつ、社会における自分たちの利益を促進する作用があると論じている。
- (12) シンシア・エンローは1940年代の戦時総動員期にイギリスの映画製作者や雑誌出版社の男性たちが、動員された女性の装いに大いに注目していたことを指摘している。[エンロー2006: 175]
- (13) 註2でも触れたように、この頃の「イギリスらしさ」を考えるとときには、Britishnessよりも、イングランドの優越というニュアンスを含んだEnglishnessという言葉の方が相応しいと考える。

引用文献

- Anderson, Bette. *We Just Got On With It: British Women in World War II*. Oxford: Isis, 1994.
- Brayley, Martin. *World War II Allied Women's Services*. (Men-at-Arms357) Oxford: Osprey Publishing, 2001.
- . Richard Ingram. *World War II British Women's Uniforms in Colour Photographs*. Ramsbury: Crowood Press Ltd, 2001.
- . *World War II Allied Nursing Services*. (Men-at-Arms370) Oxford: Osprey Publishing, 2002.
- Briggs, Asa. *Go To It!: Working for Victory on the Home Front 1939-1945*. London: Mitchell Beazley, 2000.
- Brown, Mike and Carol Harris. *The Wartime House: Home Life in Wartime Britain 1939-1945*. Phoenix Mill: Sutton, 2001.
- Bygrave, Stephen. Ed. *Romantic Writings*. London: Routledge, 1996.
- クラーク、ピーター。西沢保他訳『イギリス現代史1900-2000』愛知：名古屋大学出版会、2004年。
- Cooper, Alison. *Women's War: Britain in World War II*. London: Hodder, 2003.
- De man, Paul. *The Rhetoric of Romanticism*. New York: Columbia UP, 1984.
- エンロー、シンシア。上野千鶴子完訳、佐藤文香訳『策略：女性を軍事化する国際政治』(*Maneuvers: The International Politics of Militarizing Women's Lives*.2000) 東京：岩波書店、2006年。
- Gardiner, Juliet. *Children's War: The Second World War through the Eyes of the Children of Britain*. London: Imperial War Museum, 2005
- Harris, Carol. *Women at War: In Uniform 1939-1945*. Phoenix Mill: Sutton Publishing, 2003.
- Hopkinson, Tom. Ed. *Picture Post: 1938-50*. London: Penguin, 1970.
- 飯田 操『イギリスの表象』京都：ミネルヴァ書房、2005年。
- Lewis, C.S. *The Chronicles of Narnia: The Lion, the Witch, and the Wardrobe*(1950). London: Harper Collins, 1998.
- 村岡健次、川北稔 編『イギリス近代史 改訂版』ミネルヴァ書房、2003。
- 武藤浩史 他『愛と戦いのイギリス文化史：1900-1950年』東京：慶應義塾大学出版、2007年。

- Priestley, J.B. *British Women Go To War*. Collins, 1943.
- セジウィック、E.K. 上原早苗・亀澤美由紀訳『男同士の絆：イギリス文学とホモ・ソーシャルな欲望』(*Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*. 1985) 名古屋：名古屋大学出版会、2001年。
- 杉村使乃「工場と戦場における女性：第二次世界大戦下のイギリスにおける女性の戦時奉仕」『敬和学園大学研究紀要』第15号 2006年
- Wadge, D. Collett. Ed. *Women in Uniform*. London: Imperial War Museum, 2003.
- Weightman, Gavin. *Picture Post Britain*. London: Collins & Brown, 1991.

資料『ピクチャー・ポスト』の表紙に見る第二次世界大戦下の女性

	1938年10月(創刊)～開戦	開戦～1940年4月(Phony War)	1940年5月(Battle of Britain)～1941年3月(米武器協定)	1941年4月～12月(真珠湾攻撃)	1942年	1943年	1944年	1945年	計(内はイギリス以外)	%	
全点数	49	34	42	39	52	52	52	52	372		
女性											
女優	5	3	6	9	7	14	5	4	53	女性の32.9	
ファッション・季節感・余暇	4	2	3	4	3	4	4	8(ソ)	30	女性の18.6	
ダンサー・芸能	7	2	3	1	5	1	3		22	女性の13.7	
動員		3	2	1	2	3(西イ)	4(米2)	4(スコ1カ)	19(4)	女性の11.8	
スポーツ	2			1		1	1		5	女性の3.1	
政治(女王、夫人、娘)		1			1(中)	2			4(1)	女性の2.3	
兵士						1(オ)	1(オ)	1(オ)	3	女性の1.8	
その他(仕事・学生)			1			1			2	女性の1.2	
難民								1(ヨロ)	1(1)	女性の0.6	
解放								1(印シ)	1(1)	女性の0.6	
複数で登場	2	1	3	1	1	1	0	3	12	女性の7.5	
母と子	1		1		3(北ア)	1	1	6(ヨロ)	12(3)	女性の7.5	
少女(イギリス以外)		2(1)				1	2(オ)	1(オ)	6(3)	女性の3.7	
幼女	1							2	3	女性の1.8	
女性計	23	13	16	15	17	29	23	26	161	全体の43.2	
男性											
無名兵士(イギリス以外)	3	5(4)	9(NZ)	4(ソ)	10(米仏オ日ソカ各1)	9(ソ、北アフ系各1カ2)	14(シロヨロ)	4	54(19)	男性の36.7	
政治(イギリス以外)	1	7(独2仏1)	5(米1)	10(米ソソカ、中東各1)	2(ソ)	4(サウジ米伊各1)	2	1(ソ)	32	男性の21.8	
軍人(イギリス以外)	2(印)	1	6	2(ソ)	4(米)	2(カ)	1(チェ)	1	16(6)	男性の9.9	
動員(兵士以外)	1		2(カ1印)			1	4		8(2)	男性の5.4	
ダンサー・芸能(エンターテイナー含む)	3		2	1		1			8	男性の5.4	
その他の職業		1		1					3	男性の1.9	
解放								1(仏)	2(独)	3(2)	男性の1.9
俳優		1							2	男性の1.3	
宗教					2				2	男性の1.3	
著名人			1					1	2	男性の1.3	
季節感								1	1	2	男性の1.3
被害者									1	1	男性の0.6
複数で登場	7	5	6	3	6	4	8	4	43	男性の29.2	
父と子	1		1(ア)			1(伊)	1(仏)	2(独)	6(4)	男性の4.0	
少年	2	2	1	1					6	男性の4.0	
幼い男の子			1						1	2	男性の1.3
男性計	15	18	27	20	19	20	26	16	147	全体の39.5	
男女											
芸能人	1		1	1	4	1		1	9	男女の47.3	
兵士と若い女性		1			1			1	3	15.8	
家族							1	1	2	11	
動員					1				1	5.3	
兵士					1(オ)				1(1)	5.3	
祈り						1(ポ)			1(1)	5.3	
余暇								1	1	5.3	
男女計									19	全体の5.1	

日本語で話し歌う<他者>

—李香蘭映画にみる<東亜>のジェンダーポリティクス

松本 ますみ

はじめに

本論は第二次世界大戦中、特に「大日本帝国」とその軍事制圧地において人気を博した李香蘭映画をモチーフに、支配者である日本が被占領地と被占領者をどのように支配したのか、あるいは支配しようとしたのかについて考察することを目的とする。そのために、ジェンダー利用の構造に注目し、李香蘭という女優による映画と歌はどのような心性を特に「内地」日本人男女視聴者に与えたのかを考えていくことにする。

2007年2月に、テレビ東京で上戸彩主演の『李香蘭』が2夜連続で放映され、それがDVD化されるなど、李香蘭こと山口淑子(大鷹淑子1920～)への関心は依然高い。

本論では、特に、日本が第二次世界大戦参戦後の42年以降作られた李香蘭映画3本に焦点を当てて、ドイツ、イギリス、日本におけるジェンダーの戦争利用の表象と比較しようと試みるものである。

I. 先行研究と本論の着目点

李香蘭についての先行研究は膨大であるが、その方法論は吉岡愛子氏の分類によれば以下の3つである。

(1)日本のオリエンタリズム論：すなわち、支配者(男)－被支配者(女)のジェンダー分析をもととするものである。吉岡はこれを「本質的民族二項対立論」と名づける。これは、支配エスニシティと被支配エスニシティをそれぞれ日本人男と被支配地の女性となぞらえ、被支配地を女性化することによって、支配の正統性を主張しようとするもの。それは、男性が女性を支配することは当然とする当時のジェンダー観と、優等民族が劣等民族を支配することを当然視するという帝国主義的オリエンタリズムとをリンクさせていこうという考えに基づく。これらは、佐藤忠男〔佐藤 1985〕、四方田犬彦〔四方田2001、2002〕らの研究に典型的に表れる。また、山口淑子自身も、その著書の中で、「日本は強い男。中国は従順な女。中国が日本を頼るなら、日本はこのように中国を守ってやろう。それが『大陸三部作』に込められた密かなメッセージだった」と、述懐している〔山口淑子2004：60〕。